

#11

システムエンジニア

社会を変えるシステムを作りたい



今回はシステムエンジニアの七田人比古さんしちだひとひこにお話を伺います。中学校を卒業後、プログラミングを独学していた七田さんは、ある人物と出会ったことがきっかけでプログラマーに。そしてキャリアアップを重ね、現在、システムエンジニアとして仕事をしています。「システムを開発することで社会が変わる可能性もあるということが、この仕事の魅力でもあり怖さでもある」と語る七田さんの仕事をご紹介します。



MC・リポーター
廣村季生

システムエンジニアとは

顧客にリクエストされたソフトウェアの開発や設計を行う仕事。システムのおおまかな設計や、開発に必要な予算や人員の管理、作業の進み具合のチェックなどを行います。顧客のニーズを聞き出し、関係者とさまざまな交渉をするだけでなく、業務内容によっては自分自身でプログラミングをするなど、個別の案件をトータルで管理することもあります。技術的な能力だけでなく、顧客などとのコミュニケーション能力やプログラマーを管理する能力なども求められます。

システムエンジニアになるには

自分でプログラミングを学んだりしてキャリアアップを図ることもできますが、ITや情報処理関係の専門学校や大学で学んだあと、就職をするというのが一般的なようです。現場でプログラマーとして経験を積んで、システムエンジニアへキャリアアップをする人が多いようです。

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。



システムエンジニア・七田人比古さんに聞きました！

廣村：さっそくなんですけど、システムエンジニアってなんとなく想像できるんですけど、具体的にはどんなことをするお仕事なんですか？

七田：お客さんからシステムを作ってほしいという要求を受けて、その要望を聞いてそれをどんな機能を実装したら実現できるかなというのを考えて設計して、さらにそのウェブの画面を作ったりとか裏側のITの仕組みを考えたり、そしてそれを実際にプログラマーさんやデザイナーさんにお仕事として割り振るとい仕事をしています。

廣村：七田さんは普段は主にどんなことをされてるんですか？

七田：普段はアプリの開発をしたりとか、お客さんのウェブサイトのリニューアルを手伝ったりとかしています。

廣村：じゃあ私がよく見ているウェブとかを七田さんが作っているっていうわけですね。

七田：そうですね。

独学したプログラミング

廣村：システムエンジニアになりたいと思ったきっかけはなんだったんですか？

七田：はじめは純粋なプログラミングへの興味でした。
中学校のときに技術の授業で先生にプログラミングを教えてもらって、
で、ウェブサイトを作るっていうのをやりました。

廣村：私もやりました。私はホームページ作ったんですけど、そこから興味を持ってたんですか？

七田：そうですね、学校の授業だとそれほど深く教えてくれないので、ウェブでプログラミングについて調べると、いろいろな情報が載っているの、それをコピペ（コピー&ペースト）しながら作りました。

廣村：じゃあ、だれにも教わってなくて、自分で自ら調べて作ってったのがきっかけ？

七田：そうですね。

廣村：そうなんです。プログラミングに興味を持ってからは、どんなふうシステムエンジニアになっていったんですか？

七田：まあいろいろ紆余曲折うよまげつせつがあって。システムエンジニアになりたいわけじゃなかったんですが、まずプログラミングを勉強して、それから自分のウェブサイトを作ってみました。

廣村：自分の……。

七田：で、ウェブサイトで情報発信をして、ブログメディアみたいなものを作って、それからアプリの作り方を勉強しました。次に。

廣村：それは自分でですか？

七田：18歳のときにアプリを作ってる会社のインターンに応募して、そのとき自分、全然作ったことなかったんですけど、エンジニアの応募があったんですね。未経験だったんですけど、これはチャンスだと思って応募してみたんですよ。そしたら「本当にできるのか？ やっ

たことないのに作れるのか？ じゃあ課題を出してやる。」と言われて。一週間以内に一つ作ってきたら、試験合格っていうことでいいよって言われて悔しいなと思って、3日くらい徹夜で最初一つ作って出したら、ちょっと教えてやるよみたいな感じで、渋谷（東京）のベンチャー企業でアプリの作り方を教えてもらいました。ただそのときはプログラマーとして入ったので、ここからまだシステムエンジニアになるまでかかるんで…。

廣村：プログラミングに興味をもって、まずはプログラマーとしてお仕事なさってからシステムエンジニアになっていったんですか？

七田：そうですね。なんで自分がずっとプログラミングをやろうかと思ったのかというと、自分で起業したかったんですね。起業っていうのは自分で会社を立ち上げることでですけども。マーク・ザッカーバーグ（フェイスブック創業者）みたいになりたいと思って、自分でアプリを作ってそれを世に届けたら自分も起業家になれるかなと思ってずっと頑張ったんですけども。それで21歳のときに自分で会社を立ち上げて。その会社ではハンコをなくす、ハンコをデジタル化するっていうアプリを作っていました。

廣村：アプリで？ そうなんですね。

七田：それから、またいくつか会社を作ったりしたんですけども、だんだんだんだんプログラマーではなくて企画をする側、アプリを設計して、それを人に作るお願いをするみたいな仕事のほうになっていきました。

廣村：それがシステムエンジニアですか？

七田：結果として、今はシステムエンジニアとしてお仕事をしています。

「卵かけご飯が食べたい」と訪ねてきた人との出会い

廣村：七田さんはずっと1人でプログラミングを勉強していったんですか？

七田：僕はですね、中学校卒業した後に高校に行かないで、自分1人で勉強してきたんですけども、たまたま16歳のときにおもしろい出会いがありました。僕の実家はですね、すごい田舎にあって。で、田舎で鶏の卵とかを育てたりしてるんですね。

廣村：ええ？ そうなんですか？

七田：はい。で、家の目の前に「タマゴ売ってます」という看板を出してたんですけど。そしたらそれを見たアメリカ人が、たまたまうちの扉をたたいて、卵かけご飯食べたいんですけどって言ってきて。で、卵かけご飯は食べさせられないけど、コーヒーくらいはちょっと飲んでいってくださいみたいな感じで家にあげて。で、なんのお仕事してるんですか？って聞いたら、まあちょっと銀行のお仕事をしてって。銀行？ 営業マンですか？ と思ったら、アメリカの一番大きな証券会社のCTOだと。CTOは技術責任者で、数百億円の予算を管理するみたいな人で、その人が、僕が中学校出た後に、自分で勉強をするホームスクーリングをやってたんですね。高校行かないで自分で勉強してたんですけども。それをその人がおもしろいと思ってくれて、プログラミングとか興味があるんだしたら、うちの会社でインターンしませんか？ と誘ってくれました。

廣村：16歳のときですか？

七田：そうです。それから2年くらい、その社長さんにくっついて、その人の会社のスタッフと一緒にプログラミングを勉強したりとかお手伝いをしたりしてました。

廣村：ドラマみたいですね。すごい。

中学卒業した後は高校に行く方が多いと思うんですけど、七田さんはなぜ高校に行かず自分で学ぶことを選んだんですか？

七田：まず自分の興味のあることを追求しようと思ったんですね。それからすごい田舎に住んでいたんで、高校に行くのにも毎日1時間とか電車に乗っていかなきゃいけないので、大変だなということで、それからインターネットもあるので、自分でインターネットで勉強ができるので行かなくてもいいかなと思いました。

廣村：迷ったりはしなかったんですか？

七田：周りの人には高校は行ったほうがいいよと言われてました。例えば高校に行かないと仕事に就けないよ、とか言われたんですけども、だったら自分で会社やっちゃえばいいじゃんと思って、そこから自分で起業することを夢見て、ずっとこうやってきた感じですね。

システムエンジニアとしてのやりがい

廣村：今、七田さんはどんなお仕事をなさってるんですか？

七田：今メインで取り組んでいるのは、国連のある機関の、ウェブシステムのリニューアルをやってます。リニューアルの難しいところは、今、既に動いているウェブサイトがあるので、このウェブサイトを新しいウェブサイトに切り替えるときに壊さないように移植するということです。

廣村：一番大変なことはどんなことですか？

七田：やっぱり利害関係者の調整をすることだと思います。利害関係者というのはその、部署の体質だったりとか、それから外部のシステムをインストールしてくれる会社だったりとか、今まで契約していた会社さんだとか、そういうものの調整ですね。

廣村：聞いているだけで大変そうなんですけど、やりがいはありそうですね。

七田：やりがいはあります。やっぱり自分でモノを作るっていうのが楽しいし、作ったモノを人に使ってもらえるのがうれしいです。で、人に使ってもらっているいろいろな意見をもらったりとか、その意見をもらって改善して、もっと喜んでもらったりというのがやりがいです。でも、モノを作るっていうだけじゃなくて、システムというものが、社会に対する影響を与えるというのも楽しいところです。

廣村：社会を変えていく…？

七田：はい。たとえば、最近スマートフォンの決済ってありますけど、スマートフォンでお金を払ったことありますか？

廣村：よく使います。

七田：使ってますか？

廣村：はい。

七田：システムっていうのは単なるプログラムの集まりなんだけども、そうしてできたシステムが、みんなのお金を払うっていう習慣を変えているわけですよ。こういうふうには、システムが社会を変えてしまうっていうところが、怖いところでもあり、魅力的なところでもあります。

My 仕事道具

廣村：ここでは皆さんがいつも使っている道具を見せていただいているんですけど、七田さんがいつも使っている道具ってなんですか？

七田：私が使っている道具は、ノートパソコンとモニターと音楽を聴いたりするためのイヤホンぐらいですね。

廣村：そのパソコン、モニター、イヤホンを選ぶときのポイントってなんですか？

七田：やっぱり重たい作業をするので、それに耐えられるスペックのコンピューターを選んでます。

廣村：重たい作業？

七田：コンピューターに負荷のかかる作業ですね。

廣村：結構かかるんですね。

七田：熱くなってます。コンピューターのファンがウーンって鳴るような作業が多いですね。



好きな「音」

廣村：先ほどイヤホンの話もちよっとあったんですけど、七田さんが仕事で気に入っている音ってありますか？

七田：それはノートPCをパタンと閉じる音です。
仕事がだーっと終わって、一息ついて、ぱたんと閉じたときに、ああ仕事やったなという充実感を感じられるからです。

失敗から学んだこと

廣村：1つ1つ着実に仕事をこなしていくと思うんですけど、失敗ってありましたか？

七田：一番大きな失敗は、以前ポイントカードをまとめるアプリを企画して作ったんですけども、これがうまくいきませんでした。

廣村：どうしてですか？

七田：もし世の中にこんなものがあったら便利だろうと思ってアプリを作ったんですけども、まあそれが実際にお客さんに使ってもらうには十分じゃなかったんですね。

廣村：ユーザーのニーズが見えてなかったってことですか？

七田：そうですね、まず、使ってくれるユーザーのことをよく知ってからモノを作るとよいと思

います。

廣村：使ってくれるユーザーのことを知らなかったってことですか？

七田：大きくずれていたってことじゃないんですけど、見えてないところがあったってことですね。

廣村：具体的にはどんなところが見えていなかったんですか？

七田：僕が作ったのはポイントカードをまとめるアプリなんですが、僕はポイントカードを、ポイントを貯める人の立場で製品を作っていたんです。でもポイントカードを出すのはお店ですよ。お店の調査がもっと必要だったんです。

廣村：お店の調査？

七田：お店がなんでポイントカードというものを出すのか…っていうところを深く考えていませんでした。お店ってというのは例えば、飲食店でも自分のところの売り上げをアップさせるためにお客さんに対してそういうポイントカードを出しているんですね。

だからお店の人に使ってもらうには、お店にそれ以上のリターンを返してあげなきゃいけないんです。その設計がきちんとできていなかったんですね。

自分が考えたものが世界に一つしかないサービスだと思って開発をしていたんですけど、似たようなサービスが実はいろいろたくさんあった…ということがわかって、そのとき初めて僕は市場と言うものを調査しなければいけないんだな…っていうのがわかりました。

廣村：その失敗から何か学んだことってありますか？

七田：めちゃくちゃあります。まず一つは、お客さんが何を欲しがっているのかというのをしっかり調査しなければいけないということ。それから市場の調査をしなければいけないということ。それから起業という話で言えば、自分だけのアイデアなんてものは無い…ということを知ったということですね。

廣村：自分だけのアイデア？

七田：自分の思い付いたアイデアが、今までこんなアイデア存在しなかったとか。このアイデアを実現したらきっとスゴイうまく行く…みたいな、思い込みがすごくあるんですけども、人間って、みんな結構頭が良いんですよ。で、今までだいたいのことって考え尽くされてきたんですね。だから今、世の中に存在していないとすると、何か存在できない理由があるんですよ。だから自分だけのアイデアってというのは、単に世の中を知らないというだけで、そのアイデアを形にするためには、なにかうまく行かない原因があって、そのうまく行かない原因を解明して乗り越えることが革新的なものを作るときにすごい大切なんですね。

廣村：そのアイデアは乗り越えられなかったということですか？

七田：そうなりますね。ただ起業の世界でも、そういうアイデアってなかなか見つけれられるものじゃないですよ。自分が何かアイデアを持っていて人に聞いたときに、それめちゃくちゃ欲しかったよ！とか。それいいじゃん！って言われるモノって、だいたいダメなアイデアです。何がいかっていうと、え？ 本当にそんなものいる？とか。

それが必要かはわからないな…みたいな反応を受けるけれど、一見誰にも見向きもされないアイデアが実は社会を変えてしまうってことがあって、そういうアイデアを見つけるのが大切なんですね。

仕事で大切にしていること

廣村：七田さんが仕事で大切にしていることってなんですか？

七田：それは使ってくれるユーザーの生活をイメージして、どんな気持ちになるかなと想像することです。

廣村：例えばどんな？

七田：例えば廣村さんがコーヒーショップに行って、店員さんがカップに名前を書いてくれたらうれしいですね。で、また行きたいと思いますよね。そういううれしいポイントっていうのをたくさん見つけて、それをサービスに取り入れるということです。

システムエンジニアになるには

廣村：今システムエンジニアになりたいなと思ってる高校生たちは、どんなことをしたらいいですかね？

七田：そうですね、まずはプログラミングを勉強してみたらいいと思います。

今ならネットで簡単にプログラミングを勉強できるので、そういうサービスを探して、まずは自分で何かアプリとかウェブサイトとかを作ってみたらいいと思います。それから電子系の専門学校に行くとかもアリだと思いますね。

私は行ったことがないのでわかりませんが、基本的なコンピューターのことを学べる学校に行くといいと思います。ただ、プログラミングを書けたからといってシステムエンジニアになれるわけじゃないんですね。システムエンジニアの中にはプログラミングが書けない人もいますので、プログラミングだけじゃなくてコンピュータの仕組みの知識だとか、それからビジネスの中でどんな業務が行われるのかっていうのを理解することだったりとか。それからコミュニケーションのスキルを磨くといいと思います。

廣村：その中で一番重要なことってなんですか？

七田：やっぱり、自分でモノを作ってみるっていうことだと思います。何かモノを形にしてみる、プログラムを書いてモノを形にしていく。そのことが楽しいと思えるかどうかだと思います。

高校生のみなさんへアドバイス

廣村：自分がどんな仕事にむいているか就職でいろいろ悩んでいる高校生がいると思うんですけど、アドバイスをお願いします。

七田：まずは好奇心に素直に従ってほしいということです。それから、当たり前をぜひ疑ってほしいです。一見当たり前だと思っていることも、別の視点で見ても何か発見があったり、気づきがあったり、自分が何かやってみたいと思うことも見つかるかもしれないので、新鮮な目でいろんなものを見てほしいなと思います。

コミュニケーションの取り方：好奇心を大切に

廣村：コミュニケーションとるのが苦手っていう高校生もいると思うんですけど、何かアドバイスありますか？

七田：まず興味のあることを突き進んでやってほしいなと思います。で、好奇心のあることだったらコミュニケーションも取れると思うんですね。でもどうしても知りたいことがあったらコミュニケーションが苦手でもちょっと聞いてみたいとかあると思うので、まずは好奇心を大切に素直に進んでほしいなと思います。

廣村：興味を持ったことでわからないことを見つけたら、それを聞いていくっていうことをしていくのが大事ってことですか？

七田：そうですね。でもやっぱりまずは自分でやってみることだと思うんですね。自分でやって考えてみた上で、わからないことをどんどん人に聞いてみたらいいと思います。結構周りをよく見てみるといろんな仕事をしてる人がいるので、若い高校生とかが知りたいって思ったら喜んで教えてくれる大人はたくさんいると思います。



あたり前をぜひ疑ってほしい…という言葉が印象的でした。

★あなたにとって、今一番チャレンジしてみたいことは、どんなことですか？

.....
.....
.....

★そのチャレンジを実現するためには、どんな行動が必要ですか？

.....
.....
.....

★あなたが興味を持っていることについて相談できるのは誰ですか？

.....
.....
.....

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。